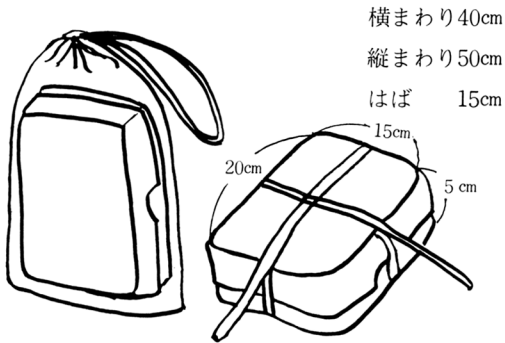


資料の活用と作業によって、思考の定着はどのようにはかれたか。

——袋のゆるみと、ぬいしろのだいたいがわかる。——

⑦ 前提学習能力調査の学級の実態

「ゆるみ」と「ぬいしろ」については、学習能力の下位能力として、下図の条件で調査した。



調査項目	正答率
わきのゆるみ	20.0%
口をしめるためのゆるみ	31.4
ぬいしろ	17.1

① 学習の手順をどのように計画するか。

「標本の条件を設定する。」

6つの袋の標本は、下記の条件で作成し提示する。(ゆるみの寸法は、前46頁の学習指導案指導上の留意点に示したものである。)

標本の番号	わきのゆるみ	め口のゆるみ	口をしめるため
1	○	×(少)	
2	○	×(多)	
3	×(極大)	○	
4	○	○	
5	×(多)	○	
6	○	×(極少)	

《表の見方》

- ……適切なゆるみ
- ×(少)……ゆるみが少ない。
- ×(極少)……ゆるみが極めて少ない。
- ×(多)……多い。
- ×(極大)……多すぎる。

○「ゆるみ」をどのような思考でとらえているか。

つぎの5つに大別された。

- C<sub>1</sub> 箱を出す時指がはいるぐらい。
- C<sub>2</sub> きついと入れにくい。
- C<sub>3</sub> ゆるすぎると箱が、がたがたする。
- C<sub>4</sub> 横のゆるみがありすぎると、みっともない。
- C<sub>5</sub> 大きい方が出し易い。
- 「ゆるみ」の正答率は高くないが、考え方としては、だいたい良好であることがわかる。

○「ぬいしろ」をどのような思考でとらえているか。

- C<sub>1</sub> 布をむだにしない。
- C<sub>2</sub> ぬいしろが多いと布がむだ。布が小さくなる。きゅうくつになる。
- C<sub>3</sub> みじかいとぬいにくい。はずれ易い。
- C<sub>1</sub>とC<sub>2</sub>は、「ぬいしろ」を考えて布の大きさを決めるのではなく、決まった布でのぬいしろを考えていることがわかる。

「標本の活用は、つぎの思考過程ですすめる。」

1. 袋の大きさを外側から感覚的にとらえる。
2. 使用の適切さに気づかせるため、実際に箱の出し入れをする。
3. ゆるみを実測し、数的にもとらえることができるようにする。
4. 「ぬいしろ」については、すべての標本を1.5 cmの適切さで仕上げたおき、観察と実測から、理解の定着をはかる。

「抽出児の動きをとらえる。」

上位群A児、中位群B児、下位群C児の作業への参加態度と思考の変容を観察記録よりとらえる。

㊦ 標本の袋を外側からとらえる。

同じ大きさのさいほう箱を入れ、黒板に吊り下げて観察した。